

読書のすすめ

その21

H29 9 / 27

読書感想画指定図書紹介

「読書感想画コンクール」は、「読書の感動を絵画表現することにより、児童・生徒の読書力、表現力を養い、読書の活動を振興すること」を目的に掲げ創設されました。読後の感動を表して人に伝え、感動を分かち合うことによってより深く読み味わうことができます。今回で29回目となりますが、締め切りは来年1月10日です。奮って応募してください。



『駅鈴（はゆまのすず）』久保田香里（くもん出版）



メールも電話もない時代。馬に乗り、駅鈴を鳴らし、重大な知らせを伝える人々がいた。その仕事を担う駅家（うまや）の子として生まれた少女が、自らの信じた道を突き進む、奈良時代の青春物語。

【みどころ】

歴史的事実や遺跡からわかる当時の様子など、本当のことを大切にしながら、創作物語として想像をふくらませました。奈良時代とそこにいたかもしれない主人公達に思いをはせて読んでみてください。（作者から）

『スピニー通りの秘密の絵』L・M・フィッツジェラルド（あすなる書房）



13歳の少女セオは、祖父がもっていた絵の解明にとりくんでいきます。その絵は巨匠ラファエロの作かもしれないのです。物語は第二次世界大戦のナチスの暗部にまで及んでいきます。

【みどころ】

少女セオが、いろいろな人の支援を受けながら、この絵の謎に挑みます。謎は謎を呼び、物語は祖父が関わった第二次世界大戦にまで及び思いもかけない方向へ進みます。1枚の絵の謎に深く入りこみ、読後は爽やかな物語。

『青い目の人形物語2・希望の人形 日本編』シャーリー・バレントール・作 河野万里子・訳（岩崎書店）



11歳の千代は、町の女子学校に入学した。級友からのいじわるにも負けず、千代は自分の役割を見いだしていく。それは、日米親善のために日本にやってきた「友情の人形」を守ることだった。

【みどころ】

1927年の日本は、町や人々のようすなど、今とは違っていました。翻訳して心に残ったのは、そんな時代に、自分で人生を切りひらく新しい精神の女性が、風のように登場した場面です。（訳者あとがきより抜粋）

『スマイル！：笑顔と出会った自転車地球一周 157か国、155,502km』小口良平（河出書房新社）



世界中を走った！ 世界中で出会った！ 世界中で笑った！ 日本人歴代1位の距離を走破した著者が現地の人々と触れ合いながら世界中を笑顔で駆け抜けた自転車旅の全てを綴った冒険エッセイ。

【みどころ】

世界中を自転車で駆け抜け、現地の人たちと触れ合った著者の冒険記です。紛争地帯や危険区域にも飛び込み、事故、強盗、感染症などに見舞われながらも、旅を通じて「人と比べなくてもよい生き方」にたどり着きます。自己嫌悪に悩む青年だった著者のたくましく変わる姿に励まされます。

『人はなぜ星を見上げるのか：星と人をつなぐ仕事』高橋真理子（新日本出版社）



星野道夫に、オーロラに憧れた高校生は、研究者から星と人々をつなぐ仕事にふみだした：宇宙飛行士、視覚障害者、震災、戦争などなど。星空と人との深い関わりが、科学を架け橋に見えてくる。

【みどころ】

著者の宇宙と音楽を融合させた公演や出張プラネタリウムを「とどける」仕事。特に、本物の星空を見られない人たちに星空を楽しむんでもらう「病院がプラネタリウム」プロジェクトは、人と星のつながりの深さを感じる。

※来月末にはすべて入荷します！（現在『人はなぜ星を・・・』はあります）